

学校だより



No.20

平成27年3月4日
尼崎市立尼崎養護学校



駆け足で過ぎ去っていった2月。高等部3年の生徒にとっては、尼崎養護学校での生活も残すところ、あと2日に迫りました。

2月の参観週間で来校していただいた保護者の方々は、もうご覧になられましたか？中央玄関の掲示板に飾られた「卒業を祝うメッセージ」。

2月20日（金）の放課後に、高等部1年の先生たちが中心となって、玄関に飾りつけをした「卒業生へのメッセージ」。

高1の生徒一人ひとりが書き上げた「祝そつぎようおめでとう」の文字。一文字ずつ見ると大きさもバラバラで、形も様々なのですが、その文字を集め言葉にすると、とても味わいのある、心温まるメッセージになっています。

春の旅立ちを感じさせてくれると共に、メッセージの背景に舞っている紙吹雪がお別れの涙にも見えました。

3月6日、旅立ちの舞台で6名の卒業生は堂々と入場し、証書授与を受け取ってくれることと思います。全校児童生徒、職員、保護者の想いの詰まった温かい拍手を贈り、旅立ちを祝ってあげたいですね。

旅立ちを祝い **卒業生を送る会**

2月26日高等部卒業生を祝う会がおこなわれました。ADL教室に集まった1.2年生が拍手で迎える中、卒業生が入場し「卒業生を送る会」はスタートしました。

各学年で相談し、準備した出し物も披露され、楽しいひとときはアツという間に過ぎていきました。高等部のみんなが集う時間もあとわずか。仲間と共に過ごす時間を大切にしながら、尼養の生活を振り返ってほしいです。

みんなちがって、みんないい
先日高等部3年生の給食室を訪問したとき、金子みすずさんの「わたしと小鳥とすず」という詩が掲示されていました。ペンで書き込んだ箇所もたくさんあり、授業でこの詩を勉強した様子がかがえました。
「みんなちがって、みんないい。あなたはあなたでいいのです」といわれているようで、とても倅せな気持ちになります。
「それぞれに優劣は無く、それぞれが、素晴らしいのだ」ということを、教えてくれる詩ですね。



私が両手をひろげても、お空はちっとも飛べないが、飛べる小鳥は私のように、地面を速く走れない。

私が体をゆすっても、きれいな音はでないけど、あの鳴る鈴は私のように、たくさんの唄は知らないよ。

鈴と、小鳥と、それから私、みんなちがって、みんないい。

長い人生にはなあ、どんなに逃げようとしても、どうしても通らなければならぬ道、というものがあつた。そんなときはその道を、だまって歩くことだ。息を吐かなくて、ただ黙って歩くんだ。涙なんかせちやがめだぜ。人間としていつかのちのちの根がふかくなるのは、

親が子どもを育てるといことは、まさにこの「道」を歩むことだと思います。そして子どもも成長の過程で、親の歩みを見ながら、通らなければならぬ「道」を歩みます。

しかし近年、私たち大人は、こういった道を歩むのを嫌がるようになったと聞きます。労の少ない安易な迂回路を探そうとしているようです。そして見つからないと、イライラし幼い子どもに当たり散らす親や、厳しくする意味を間違えて、体罰に走るスポーツ指導者もいます。

「この子のためには自分という支えや導きがなくては…」といった静かな自信と誇りを持つ

て、黙々と歩む親や大人が必要であるとも言われています。

子育ての考え方で、2月学校だよりNo.18で躰の言葉の意味について紹介しています。「しつけの本来の意味は、着物の仕付けから来ているのではないか」という内容でした。

仕付け糸は、いよいよ着物ができあがるとはずされます。それと同じように、子どもも自律的な行動ができるようになると、しつけはその役割を終えるのです。しつけは、親が子どもを強制で動かすことではなく、親による強制の必要をなくすためのものなのです。

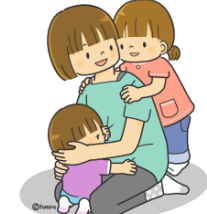
さて、幼児期（生後1年から学齢に達する6歳までの期間）になると、子どもは自由に歩き回るようになり、言葉で自己主張をします。この年齢期は好奇心に任せて動き回るので、親から見ると危なっかしいのです。そう、親がして欲しくないことばかりやりたがるものです。ですから、親は絶えずしつけの一環として「いけません」「だめよ！」を連発してしまいます。こういう状態から抜け出し、親の禁止の言葉が不要になるまでにはどんなステップを踏まねばならないのでしょうか。

親の「いけません!」に対して、子どもは「自分の欲求をあきらめて親に従う」か、「あくまでも自分の欲求を押し通す」か、二つの選択肢に迫られます。しかし、どちらを選んでも子どもの本当の成長にはつながりません。

前者は「よい子だ」と周囲にほめられるかわりに、ほんとうの自分をひたすら押さえることになり、よい子の振る舞いは、辛い重圧となって自分を苦しめ続けます。いっぽうの后者は、我がままを通したために、親からの罰が待っているかもしれせん。また、我がままを続けていると、本人が気づかぬうちに親の愛情を失ってしまうことへの恐怖と闘わなければならなくなります。

いずれにせよ、子どもは心の葛藤を余儀なくされます。しかし、いつまでもこうした状態に留まっています。やがて、第三の解決法を見つけ出すようになります。それは、ひたすら自分の欲求を我慢するのではなく、親に背いて自分の主張を通そうとすることでもありません。ある程度譲歩しつつも、自分の望みをあきらめないですむ方法です。

たとえば、買って欲しい服があるけれども、高価なので買ってもらえません。しかし、どうしても欲しくてたまりません。そこで、「つぎの誕生日に、プレゼントとして買ってくれないかな？」と、親に交渉します。すると親が承諾してくれました。ただし、誕生日までには4カ月もあります。



長い辛抱の末、とうとう手に入れることができました。こういう解決法は、自己の欲求に折り合いをつけるという意味で子どもの成長と言えるでしょう。

このように、しつけの最中にある子どもは、自分の欲求と行動を調整する方法を少しずつ学び、やがて自律した一人前の人間に成長していきます。
(家庭学習研究社ブログより一部引用)